

馬見ヶ崎の由来

今から300年ほど前の元和8年、山形城主の鳥居左京亮忠政が、城下町保護のために暴れ馬と呼ばれ、大洪水を繰り返していた当時の馬見ヶ崎川の流れを盃山のふもとから一気に北上させるという大改修工事を行った。その時、馬に乗って岬から指導していたことから、『馬見ヶ崎』の地名がついた。

郷土の先覚者 長谷川利助

長谷川利助は100年も前に荒れる馬見ヶ崎川に橋を架け堤防を築き大野目新道を開くなど郷土のために働いた。今日の馬見ヶ崎川と馬見ヶ崎橋、そして馬見ヶ崎付近の私達の安全な生活は彼のお陰といっても過言ではない。

自らの財産を投じて荒れる川に橋を架け、流されても諦めない不屈の執念が県当局を動かし、明治21年180mという当時では空前の大橋が完成する。九十九間あったその橋は「九十九橋（つくもばし）」と呼ばれた。九十九橋と共にできた、大の目新道も彼の偉行だが、将来拡張工事が行われることを予想して県のために既に土地を確保していた。この工事は実際に昭和41年に拡張される。明治の先達の『1000年の計』は素晴らしい。

最上の観音霊場

日本三大急流の一つに数えられる最上川は、山間をぬって盆地から盆地へ、その流域220キロ。県の76%を灌漑する大河で、江戸時代には舟運が隆盛をきわめ、東北の大動脈であった。この最上川に沿って南は上山から北は真室川の近くまで三十三の観音霊場が点在し、現在でも巡拝が行われている。

馬見ヶ崎川流域には第5番札所の唐松観音がある。